島尾敏雄作品集

2

晶文社

島尾敏雄作品集　第2巻

昭和三十六年九月二十日　初版
昭和五十二年二月十五日　十四刷

著者　島尾敏雄
発行者　中村勝哉

発行所　株式会社　晶文社
東京都千代田区外神田二―一―一二
振替口座東京六―六二七九九番
電話東京(二五五)四五〇一

印刷　株式会社堀内印刷
製本　有限会社美行製本

© 1961 <検印廃止>　落丁乱丁本はお取替えいたします

島尾敏雄作品集 2

目次

出孤島記　一
宿定め　三
ちつぽけなアヴァンチュール　三
摩耶たちへの偏見　六
黄色の部分　九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

アスケーティッシュ自叙伝　一〇三
いなかぶり　一二二
旅は妻子を連れて　一三六
夜の匂い　一四〇
長篇　贋学生　一六五

奥野健男・解説

出孤島記

三日ばかり一機も敵の飛行機の爆音をきかない。こんなことは此処半年ばかりの間、気分の上では珍らしいことだ。その為に奇妙な具合に張合いを失つていた。

三度の食事時に、定期の巡検のように大編隊でやつて来て、爆弾やロケット弾や機銃弾を、海峡の両岸地帯にかけてばらまいて行く。そしてその中間の時刻には小数機でやつて来たから、海峡の両岸ではいつも爆音の聞えない時はなかつたことになる。言うまでもなく夜は夜で夜間戦闘機がやつて来た。それで一日のまる二十四時間飛行機の爆音で耳のうらを縫われてしまつた。

それがこの三日ばかり、ちつとも音沙汰がない。

半年もの間寝ても覚めても、その音響ばかりが気にかかり、その音響の状況によつて毎日の生活の順序などが按配されていたような、その上に生命に危険のあるその音響が、そして勿論その音響の原因である飛行機がぱつたり来なくなつたと言うことは、頗る奇妙に迷つて感じられた。それは無気味なことだ。

それに、我々はもうなすべきどんな仕事もなくなつてしまつた。

戦争の嵐の眼は、我々の頭上を通り過ぎてしまつたのではないか。そして我々は圏外に取り残されてしまつたのではないか。

もしそうであるとすれば、孤島に残された我々は食糧の確保の計画を立てなければならない。

島民からの食糧の入手が困難であることは明らかであつたので、それは我々自身の手で作り上げなければならない。

現実に戦闘がない以上、我々は異常な興奮でいつ迄続くか分らぬ毎日を過すことは出来ない。我々は普通の神経でその

毎日を飲食し排泄して暮さねばならない。

我々は或一つの仕事を除いては役に立たない戦闘員であつた。

或る一つの仕事というのは、我々が敵から「スイサイド・ボート」と呼ばれた緑色小舟艇の乗組員であることによつて運命付けられていたものだ。

長さ五米、幅約一米の大きさを持つたベニヤ板で出来上つている木つ葉舟がそのボートであつた。一人乗で目的の艦船の傍にもつて行つて、それに衝突し、その場合頭部に装置してある火薬に電路が通じて爆発することになつていた。衝突場所がうまく選ばれていた場合には、多分二隻で目標の輸送船一隻を撃沈させることが出来るであろう。もう少し欲を出して軍艦一隻を轟沈させる為には、近接が成功したとして更にもつと多数の我々の自殺艇を必要とするだろう。そして我々乗組員はそのような戦闘場裡にあつて、沈着に、突撃の百米程前方で、針路を絶好の射角に保つたまま舵を固定して海中に身を投じてもよいことにはなつていた。もしそんなことが出来るとすれば。

今でこそ不思議に思うのだが、私はそのような目標直前での舟艇離脱という冷静な行動がとれそうにないから、いつそのこと自殺艇と一緒に敵の船にぶつかつてやろうと、もうその他にどんな道も自分に許されていないように思い込んでいたことだ。

この一年間というものは、そんな事情で、明けても暮れても、身体ごとぶつかることばかり考えていた。

我々が、この特定の孤島に基地が選ばれて移動して来てからも既に九カ月ばかりが過ぎ去つていて、その間に戦闘準備作業は殆んど完成してしまつた。最良の状態にではなかつたけれど、寧ろ幼稚極まる状態に於てではあつたが、許された手持の材料ではせい一ぱいの準備は完了し終えてしまつた。

誠に色々な仕事が我々の眼の前に生じ、そしてそれを強行して来て、もう今はすることがなくなつてしまつた。本州との輸送連絡は絶たれ、新しい材料で兵器を強化するということは考えられなかつた。

ただその時与えられてしまつていたものだけで、最大の効果をあげなければならない。

然し自殺艇の効果も時季のものだ。計画では三十五ノットも四十ノットも或いはそれ以上の高速が出る筈であつたものが、我々が受取つた時に既に二十ノット出るかどうかがあやしいのであつた。機関やその他の部分品の予備品が補充される見込が失われてしまえば、艇の性能は次第にやくざなものになつて来る。

整備の要員も配属されて此の孤島に渡つて来ている者だけに頼らなければならないし、彼等の技術を不安に思つたとこ

ろでどうにもならない。
そして我々乗組員にしてみたら一層急場の間に合わせ訓練で速成の教育を受けただけの者ばかりなので、エンジンのことについてすらトラックの運転手程にも知ってはいなかった。

エンジンはさびつき、船体はくさりつつあった。そしてその愛すべき自殺艇は、急拵えに我々が掘り抜いた洞窟に格納されていた為に、常にひどい湿気の中に浸っていた。
艇の寿命も心配なことながら、間に合わせの格納洞窟の崩壊の時期もそんなに遠くはない。
つまり我々の自殺艇がそれを考案した者の予期するような効果をあげる為には、或る時期のうちにそれが使用されなければならなかった。
あゝ、その時期も終りに近い頃、我々は敵にさえ見放されてしまったのではないか。
その時期は強引に過ぎ去ってしまうのだから、その時期さえ過ぎてしまえば、我々は自殺艇の乗組員である運命から解放される訳であったが、我々は、というより私は無理な姿勢でせい一ぱい自殺艇の光栄ある乗組員であろうとする義務に忠実であった。
そうでなくなってしまえば、それこそ拳銃一挺だに無い戦闘員が出来上ってしまうことになる。
私の眼界は昏く、拳銃一挺もない戦闘員になることはひどく頼りな気で、そのような場合どんな処置をとってよいか分らない。一カ年ばかりの間自殺艇と共に死んで行くことを稽古して来たのだから、せめてそのつもりで転結しようという呪縛にかかっていた。
それに私が百八十人もの個性の集団の中で、命令する位置が保てたのは、何はともあれ我々の集団の中にあって自殺艇乗組員は総員の四分の一ばかりであり、私はその四分の一の中の第一号であったから、同じ戦闘員仲間の間に於てでさえ奇妙な伝説の中に住み込んでいる結果になっていたからだ。

一種の焦慮。それは艇の腐朽や洞窟艇庫の寿命、そして隊員の食糧問題などの複合から生じていたものだろう。それに私は百八十人が極く悪い状態に陥ちこんだ場合に、彼らがどんな赤裸々な姿を現わし出すかを冷静に計算してみたことは一度もない。
人々の陥り勝ちないやな傾向を詮索することにそれ程熱心ではなかったかも知れないし、その為に私は現実を認識することに浅く、従って表面は何事も波立たないで、たとえば私の性格のような隊風が出来上っていたのかも知れない。
この事実はおそろしいことだ。一つの隊の性格が指揮官の

性格次第で色々な色がついているとは。自分の体臭は消し難く、而も私は毎夜名前のない神に祈つて体臭の消えることを願つた。

そんな日々に於いても、我々がその日その日を生活するための一切の関心を挙げて、そこに集中している敵機の出現が、多分向う側の計画で三日間も見ることが出来ないということは、ひどく不吉なことだ。

いよいよ我々集団自殺者の祭典の時刻が近付いたように思われた。我々のその行為によつて戦局が好転するとも考えられなかつたが、それでも誰に対してしたか分らぬ約束を義理堅く大事にしていたのだ。我々は犠牲者だと自分に悲劇を仕掛けている気分もあつただろうし、又仮構のピラミッドの頂点で、お先真つ暗のまま、本能の無数の触角を時間と空間の中に遊ばせて、何とか平衡を保とうとしていたのだろう。

既に原子爆弾が広島と長崎に投下されてしまつたことを我々は無電で受信していた。

私はその頃の時間の感じに自信がない。時は進んでいたのか、逆行していたのか、或いは又停止していたのか、然しそれを疑つてみたというのではない。ただ私にとつて歴史の進行は停止して感じられた。私は日に日に若くなつて行つた。つまり歳をとつて行かないのだ。私の世の中は南の海の果ての方に末すぼまりになつていた。その南の果ての海は突然に懸崖になつていて海は黒く凍りつき、漏れた海水が、底の無い下方に向つて落ち続けていた。

私はそこから落下する為に、毎日若くなつて行つた。而もそこに行く前に、一つだけ思いきつた行動を起さなければならない。眠つている間に、そつとそこに突き落して貰うというわけにはいかない。一メートル歩く為にも、こちらから身体を起して、重い足を動かさなければならない。

そして時は不気味に進行を止め、毎日の出来事は既に歴史書に書かれていることばかりのように思えた。どんなことが起つても新鮮な驚きを感じなかつた。ムッソリーニが虐殺されたこともヒットラーの消失も私にはその意味が分らず、歴史年表の古い記事を読むのと変りがなかつた。然しどこでそんなことになる歴史が始まり、そしてその次に何がやつて来るかについて私は何も考えることが出来なかつた。私の頭の中には猛烈に無気力な空白の渦があつた。昨日は今日に続かず、そして又今日は明日に続いて行きそうもない。ただ南方洋上のT島のあたりが絶え間なくどろどろとおどろに鳴り響き、運命の日をのみ待ちくたびれて、一瞬一瞬だけが存在しているようなその日その日があつただけだ。

私の世界が、黄昏れていたそのような時に、まず広島の運命を知つた。

それは新型爆弾と報道された。詳しいことは分る筈もなかつたが、その爆弾によれば、山も一部はどろどろに崩れ落ち、人間はその光線を受けただけで消失したと伝わつた。要するに原子が破壊され（と素人考えをしたのだが）、物質は何もかもばらばらになり土に返つてしまうのだろう。その爆弾の効力の及ぶ範囲などに疑問が持てないこともなかつたが、とに角広島市が一瞬に消滅し、そしてそれは又長崎市の運命でもあつた。長崎の壊滅ということは殊に私を感傷的にした。私はそこで四年間も暮していたことがあつたのだから。

自殺艇乗組員の私にとつて、思い出ということの素直な感じはなくなつていたが、それでも長崎壊滅の報せは、暗い終末を一層確定的に予言されたと思つた。私は誰の為に死んで行き、そして私の死んだ後には誰が生き残つているのだろう。

不思議なことに、原子爆弾のニュースは私を軽い気持にした。これで私も楽に死ぬことが出来そうだ。それは恥ずべき考えであつた。然し私はこつそりそう感じ、之を口外出来ないという罪の意識を自覚した。

こんなひよわなぼろボートで子供だましの戦闘をしかけて行く蟷螂の斧の滑稽さが、もつとよりがつちりした必然さのローラーの下で果敢なく押しつぶされてしまう奇妙な安堵であつた。それに対して尚あがいて見せろとは要求して来ないだろう。私は未だ誰かの命令に拘わり、その命令に忠実であろうとしていた。

命令を純粋に公式のように自分に課して、未知の世界に対して自分を実験してみようという気持がなくはなかつた。然しその気分と平行して、命令されることにはただ臆病であつた。命令を出す者への疑いを消すことは出来なかつたけれど。

然し原子爆弾の前では、どんな命令も恐らくナンセンスに思われた。

今度の新型爆弾は頗る強力なもので、従来の防空設備では用をなさないから、各隊は速やかにそれに対処すべし、という命令が防備隊司令より発令されても、私はそれを一笑に付し去ることが出来た。

何という奇妙な解放感であつたろう。

と同時に、ぐつたりと疲労を自覚した。今迄の夥しい犠牲を支払つて来たこの戦争がこんなに頼りないものであつたのか。

私は思い煩うことを軽くさせられていた。その頃を前後として、敵は空から我々に象形文字で書いた印刷物を配付して呉れた。

それには二宮尊徳のことが書いてあつたり、十二時の時計に形どつて向うが次々に奪還し或いは占領した島々が画かれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

てあつた。十時の所には硫黄島の、そして十一時の所には沖縄島の略図がそれぞれ示されていて、その上のところで日章旗がへし折られてあつた。時計の針は正に十二時に近付こうとし、其処には日本の本土が置かれていた。

我々は沖縄島と本土との間にあつて、遂に硫黄島程にも歯牙にかけられていないのか。そのくせ私はほつとしていた。

或時は我々はポツダム宣言の要約のビラを天から受取つた。

それにつけても、それを国際公法の知識でどれ程正確に読みとることが出来たろう。それはむしろ滑稽な仕業に思えた。そしてポツダム会談というような歴史事件は、中学生の頃に教科書で既に習つてしまつた気がするのであつた。そんな古臭いことを、何故今頃持出して来て、その要約を空から我々にばらまいたりするのだろうと思つた。

要するに我々は孤立の世界に追い込まれて、瞬間瞬間が重なつて行くに過ぎないだけの生活をしていた。

高い空を四発の大型飛行機が、いやな連想をしか私に与えない、にぶい然し太い複合の爆音を散布しながら、一機だけ飛んでいるのを私は、石ころの多い浜辺で見上げていた。

高所を飛ぶ大型飛行機はそんなに恐ろしくない。南の真夏の太陽が強く照り、空は気が遠くなるほど青く、而も光を一ぱいに含んでいた。それだけの距離を置いてもその飛行機は、へんに大きく感じられた。ふと私の感覚はしびれ、一切の物音は聞えなくなり、その大きな空のくらげの化物のような物体が、すいすいと移動して、私の頭上の方にやつて来た。

その透き徹つた感じの機体から、さつと銀粉のようなものが放出された。その瞬間のきらりとした一閃に、私は思わずどきりとして、崖の窖に走り寄つた。

その一閃が原子爆弾に関係した前兆であるかも知れないと考えた。原子爆弾によつて、私の肉体の原子が破壊し尽され、どろりと土になつてしまうことを、期待していたつもりなのに、私の心はみにくい避難の姿勢をとつていた。そしてその姿勢には科学的考慮が殆んど訓練の跡を残していないのだ。

然し空のくらげの化物が飛び去つた後で、きらりきらりと綾な光彩の変化を見せて、空のただ中に広がり舞い落ちて来たのは、敵方からの伝単の贈物に違いなかつた。

それはやがて海の上や岬の岩の間、畠や溝や豚小屋の汚物のそばなどに汚れ落ちて置かれるだろう。

そのような日々の後に迎えた、三日間の無気味な静寂に私は戻らなければなるまい。

無気味なと感じたのは私であつて、この孤島の浦曲には、

すぐ手の届くついこの間まで、戦争の影響がまだ押し寄せて来ない日々がそうであつた、長い年月の間のふだんの山川草木の姿があるだけだ。私だけが日毎の爆音に神経を亢ぶらせて、山川をしつかり見ることが出来なかつた。私のとがつた心の中では、その辺のどこを掘り起しても、危険な信管のついた物体が掘り起されて出て来た。

爆音の全く聞えなかつた三日のその最後の日は、夏の暑さや、潮の香り、草木のうむれ、鳥の鳴き声、蛙の声、干潟のつぶやき、部落なかのかそかな物音、例えば何か槌を打つ音とか、子供の誰かを呼ぶ声とか、豚の悲鳴や鶏のとき、そんな色々の、ふだんの感覚や物音が、太陽の熱に膨脹して、物うく、然し充分に厚い層で、ひしひしと私の身の廻りを取り巻いて来たことを、あらためて強く感じた。

それらは非常に切なかつた。そして何事も事件らしいことの起きない目立たない平凡な日への郷愁が、私の身体をしびれさせ、原子爆弾に対してはどうすることも出来ない、という無抵抗感が、低くにぶい伴奏となつて私の身体の底に或る響きの調子を沈めて保つていた。

その日の午後私はからだと心を持ち扱い兼ねた。

隊員の殆んどは、畠の芋造り作業に充てられていた。そんなことしか仕事はなかつたからだ。艇隊訓練も次第に間遠に数がへらされていた。勿論暗夜の而も敵の夜間飛行機が偵察に来ないような時を選ばなければならなかつただけでなく、使用度による艇の効率の減落と寿命への接近が頭痛の原因となつていたからだ。それで自殺艇乗組員も亦、芋造りに主力を注ぎ出した。四つの艇隊の間での競争や又他の整備員や基地隊員や本部要員（その中には医務員、通信員、烹炊員、経理員などが含まれていたが）などとの一種の対立が、そのように将来の食糧確保に関係した地味な作業過程にはいると、ぶすぶすいぶり始め出してもいた。

艇隊員はつまり自殺艇乗組員のことだが、彼等の中に、明らかに我々は生き残るであろうという予言をし始めるような者も出て来た。それはいくらか滑稽味を加えて、そして反面狂信的な調子で言い始められた。もつとも彼等は自殺艇の遂行を拒むような要素は少しも匂わせず、自分らがその任務に選ばれていることに特権の意識を抱き、他の隊員との間に待遇の峻別を期待していた。それでその予言というのは、遂には彼等は、突撃の為に出陣するであろう。しかも彼等は生き残るであろう。それでなければ、或る夜忽焉として敵艦船の蝟集する沖縄島が陥没するであろう、というのだ。然し彼等が期待するようにたとえ生き残つたとしても、戦争自体が終末しない限り、我々は更に前線に進出しなければならない。

既に我々には掌特攻兵というマークがついてしまつていただけでなく、そのような粗い仕事のほかは何も出来ない伎倆しか訓練されなかつたし、そういう状態でかなりの期間特権的な生活をして虫食まれていた。

私は無聊であり、ただ待つているだけだ。特攻戦が下令されるその瞬間を、だ。どこか日陰者の生活に似て居り、即時待機で、その時を待つていた。それは頗る不自由であつた。そしてそれをまぎらして呉れた敵機の爆音も、もう三日もきかない。三日の間やつて来ないというのは、一体どういうことなのか。

私はひどく末期症的な考え方に陥つてしまう。私は防備隊の司令部に敵状を再三問合わせた。すると敵機の大編隊は、もうこの孤島などは歯牙にもかけずに日本本土の方に向つて北上し、そして一仕事の後に又沖縄の方に南下することを繰返しているというのだ。

何かすべてが急転直下の様相を帯びて来たようだ。だがそのような時にこそ我々の隊への危険は増大して来る。

何気なく孤島の近海に近寄つた敵艦船に対して我々は突き当る為にいつなんどき出発させられるかも分らない。

しかし若しものこと、我々の孤島が全然戦略的価値がなくなつて、敵は沖縄から素通りで、本土の方に行つてしまつたら、我々に或いは新しい生活にはいれる途が開かれるかも分らない。

そんなことを考えながら私は、海辺に近い高見の豁口にある木小屋の本部の隊長室を抜け出して、ぶらぶら磯伝いに、隊の構内を岬の鼻の方に向つて歩いて行つた。

兵舎は分散して浜辺の小さな谷間を利用して建てられていた。そして浜辺に突出した尾根の岩層の適当な場所を選んで奥行三十米前後の壕を掘り、自殺艇を格納してあつた。隊のある入江の口は、直接には海峡に向つて開かれていない。狭い細長い入江はその袋口のところで直角に折れ曲つていたために広い海峡からの直接の風波も、その折れ首の所でさえ切られて入江の中に直接には影響せず、我々の入江はまるで山中の湖のように思える時があつた。視界も入江の中だけに限られ、その限りの狭い範囲では、我々の秘密部隊は隔離された気分になることが出来たし、又実際に我々だけの生活を展げていることが出来た。私は防備隊司令の許可をたてにして、小舟による入江の袋のところの奥の部落と、他部落との交通を禁止していた。我々は軍機部隊だからということによつてそれができた。

静かな入江うちを浜辺沿いにぶらぶら歩いているうちは、気分は丸く完結し、と同時に義務や責任のことばかりが繰返

し考えられ、隊員を厳重に、入江うちの隊内にとじ込めてしまつたそのことの報酬のように私も共に閉じこめられていた。

入江うちでは、私は到る処で、隊長という位置で表立つていなければならない。

入江の折れ首の地点は、尾根がつき出ていて、裸岩が海の中にまで列を為し、むき出たまま風にさらされ潮に洗われていた。干潮の時は海底が露出して、岩石は痛々しい感じを与えた。そこは丁度細長い隊の構内の片方の端になつていた。我々は其処に番兵を常置した。

私は番兵塔の方に歩いて行った。

そこの番兵には、大てい基地隊の第二国民兵役から補充された三十歳から四十歳以上にも及んだ年配の、この隊では最も下の階級の兵が当つた。彼等の仲間は総数五十名ばかりで、既にかなりの社会的地位を持つた雑多な職業経歴を有する者たちの集りだが、中でも農業者がいちばん多く、それに鉱山監督、役場の吏員、巡査、パン製造業者、傘張り、理髪屋、町会議員などの職業を有する者が交つていた。又文盲が二名いた。精神薄弱者もいた。

彼等の服装は一番ぼろで、そして一番下積みの仕事を負担した。彼等は殆んど何らの軍隊教育をも受けないで私の隊に配属されて来た。その主要な任務は、自殺艇の艇庫からの搬出入作業で、最後の運命の日に自殺艇が基地を出払ってしまつた後は、もうそれらは二度と再び基地に帰つては来ないのだから、基地隊の彼等は小銃と手榴弾だけで陸戦隊を編成することになつていた。

彼等の殆んどは戦闘作業には不向きであると思われた。彼等は規律や訓練を最も嫌つた。その代りのように彼等はそれに一番ひどくこたえた。

短期間の間に彼等はどんなにつらい訓練に堪えて来たことだろう。落伍者の出なかつたことが不思議な程だ。

近頃は兎に角一応陽焼けしてたくましくなり、形式的な規律に自分をあてはめてあやしまない程になり、それ迄には見られなかつた新規の兵隊のタイプさえ出来上りつつあつた。

そして此の頃のように我々の隊が屯田兵の様相を帯びて来ると、彼等の確実な生活の根が段々頭を擡げ始めたように見えてきた。

入江の折れ首の崖際の岩の上で、私はその老番兵の捧げ銃の敬礼を受けた。ひどく生真面目に口をとがらせて前方をにらみつけていた。私は彼の眼の前を通つて隊の外に出て行かなければならない。

海は丁度最低潮であつた。私は狭い崖際の岩盤の上を番兵のそば近く通らないで、干上つた砂浜を遠廻りして外側に出

た。

外側は空気が動いていた。

そして眼界が広く開けた。

入江うちが淀んで凪いでいても、此処に来て、足を一歩入江そとの方にふみ出すと、風が耳のうらを鳴って通り、身体の中に飼っている鳩が自由なはばたきをあげて飛立つ思いをした。

沖合の波は白く穂立ち、かもめがゆるく舞っていた。そして入江は海峡に大きく口を開き、その海峡越しに、はるか向うの島の山容、海岸沿いの県道の赤い崖崩れなどが、痛いようにこちらの気持に手を差し伸べて来た。

入江うちでの重い荷のようなものが、背中からはがれ落ち、私は軽々と自分自身になって、何の才能も技能もないままの姿を浜辺に伏せることが出来た。

私は外側の砂浜に身をなげかけて、仰のき、両腕を後頭部の下に組んで、青い空を見上げた。入江うちの隊内でそういう姿勢をとることは困難だ。でもいくらかすぐそばの岩の上の年配の番兵の眼を感じながら私はそうしていた。彼は黙って、いつまでもそのような姿勢でいる私を見ているのに違いなかった。私はこの状態を太陽の光線のように快く感じながらそうしていた。少く共その場合私の姿勢は自由であり、番兵の姿勢は不自由であった。然し私は彼から悪意を感じとることが出来ない程、自分の崩したその姿勢に、自然をくみ取っていた。

私は身内がほんのりこげ臭くなるまで、陽に焼けた石と、空気を通して来る太陽の熱と、そして磯の香や、松風のにおい、舟虫のしょっぱさにまかせて仰のけになっていた。やがて私は身を起して、又歩き出す。海峡の中にぐっとつき出た岬の鼻の方に行こうと思った。

その岬の鼻をぐるっと向う側に廻って行けば、隣りの入江はこちらより、広くそして海峡にじかにその全貌を現わして居り、その入江の奥の部落も大きく、役場や農業会や小学校、駐在所などが置かれているような場所でもあった。

私はどうしてもその部落に足が向き勝ちだ。

この三日間に、戦局の様相の末期的現象を強く感ずると共に、私は自分の身体がひどくがたがたになったことを感じた。食欲はすっかり減退した。

本部の中では食事に関心の深い他の士官たちの強い自己主張が、私の食欲を一層減退させるようにも思えた。私の食欲のないのは私の装いであったかもわからない。でなければ私の胃腸は神経障害に原因していたと思われる。私は明けても暮れても、或る命令を持ち、それの対策ばかり、空しく胸算用で繰返していたのだから。でもこの自殺艇が最初に使用されたと思われるリンガエンでも、その次の沖縄ででも、体当

りの効果があつたようでもない。否それは完全に失敗であつた。同じ時期に派遣された自殺艇隊で無疵で残つていたのは、この孤島に派遣された二、三の艇隊だけになつてしまつた。我々の艇の効果にしたところで成算のあるはずがない。せめても神経を麻痺させて呉れる超高速さえ奪われてしまつた自殺艇に、私はどんな期待を持つことが出来たろう。

私は神経衰弱に陥つていた。私自身はそうは思えなかつたが、小胆な私がそうでないわけがない。その為に食欲が減じ、顔色が蒼白くなつて来た。他の隊員は連日の屋外作業で逞しく陽焼けしているというのに。

身体がとてもだるかつた。南海の暑気のせいもあつたかも知れないが、海ばたの生活はむしろ我々に快適であつた筈だ。

なぜそういう感じを持つに至つたのかは分らないが、司令部の最高指揮官の早急な判断で無意味な犠牲者になる日が遂に近付いたと私は考えた。さもなければ、戦争の終結を見るだろう。然し自殺艇乗組員にだけは甚しく悲劇的な顚末しかやつて来ないのではないだろうか。その乗組員にとつては末すぼまりの予感がするけれど、一般的情勢は戦争の終末を来すだろう。それがどんな形に於いてであるかは、当時の私は考えることを避けていた。然し我々が出発した後に残つた者たちはどんな状態に於いてであれ生命は全うすることが出来るであろう。

何故そういうことになるかというと、敵の機動部隊が、もう我々の孤島に用事はないのだけれども、日本本土への航行の途次、ついうかうかと我々の孤島に接岸航行をするようなことがないとも限らない。行きがけの駄賃に少し示威運動をして置こうと、茶目気のある考えを起さないとも限らない。然し我々の孤島側は余裕のある考え方が出来ないに違いない。その上に完全な電波探知機一台すら手中にしていない貧弱な見張網の報告の綜合の結果、防備隊にいる司令官は遂に我々の自殺艇を使用してみることを決意するだろう。彼は沖縄島への赴任の途次、沖縄島が救うことの出来ない状態に陥つたので我々の孤島に止り、北部南西諸島方面の海軍部隊の最高指揮官になつたのだが、此の方面の海軍部隊に彼が認めた艦艇は、我々の自殺艇によつて編成された五つの水上特攻隊と四隻の特殊潜航艇しかなかつた。海軍部隊としては、それは何としても奇妙な兵備であつた。その他に機帆船で編成された輸送船隊があつたが、それがどの程度戦闘に役立つかを真面目に評価することは出来ない。そして末期現象の特攻兵器だけを以つて連合突撃隊を編成し、それぞれの隊の指揮官の先任順に序数番号がつけられていた。第一突撃隊は海兵出のQ大尉が指揮官であり、重ねて連合突撃隊指揮官も兼摂して

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com